



黄金色のムーンサッカー

前に、おばさんの家に来たのは、たしか二年前だった。
その時は母さんにつれられて来たんだ。

今度はひとりきり。
たのまれたとどけ物を持っている。

これは何だろう？

スーパーでくれるような白い手さげ袋に入っている。
ちょっと重い。

朝、家の近くのバス停から、森野村行きのバスに乗った。
おばさんの家は、寝子原（ねこはら）というところにある。

はじめて、一人でバスに乗るから少し緊張したけれど、母さんが送ってくれたから。
バスをまちがえる心配はなかった。

でも、どこをどう通って来たのかよくわからない。

「次は寝子原です」というアナウンスがあったので、
あわててバスをおりてみたら、あたりはもう夕暮れだった。

おばさんの家って、こんなに遠かったかしら。
前に来た時のことをよく覚えていない。

「バスをおりたら、横に細い道があるから、それをずっとまっすぐ歩いて行けばいいの。
そして、つきあたりを右、あとは道なりに歩いて行けば、お家の玄関が見えてくるわ。
私もあなたぐらいの年に、ちゃんとおつかいできたのよ。美祢子ちゃんお願いね」

母さんはそう言ったけれど、着くのが夕方になるなんて聞いていなかった。
はやく行かないと、夜になってしまう。

バス亭の後には、ベンチが置いてあって簡単な雨よけのついた待合室が建っている。
あたりが薄暗くなっているので、小屋の中が暗くてちょっとぶきみ。

中から何か出てきそうで怖い。

私は急いでその前を通り過ぎようと、足を早めた。
でも、怖いもの見たさってあるのね。
いやだと思いつつ、チラッと見ないではられない。

だいじょうぶ、何もいない。

光った！ やっぱり、何かいるよ。

目をつぶって駆け抜けようとした。

「ふにゃーあ」
間の抜けた声がして、暗い小屋の中から、のっそりと何かあらわれた。

猫だ。

光ったのは、猫の瞳だったらしい。

「なんだ、猫か」

私は胸をなでおろした。

「なんだとは、失礼だな」

変な声がした。
のどを鳴らすような、聞きにくい声。

あたりを見まわしたけれど、誰もいない。
あたりまえよ、バスをおりたのは私一人だもの。

なのに、なぜ？

「こら、オレさまを無視する気か」

しゃべった。

「おまえ、失礼なやつだな。せっかく話かけてやってるというのに」

「わたし？」

「そうだよ。他に誰がいるね？」

猫は太った背中をしならせて伸びをした。

「普通は、見ず知らずのヤツに声なんかかけないんだがね。今日は特別な日だから」

「特別な日？」

「そうさ、特別な日」

「猫がしゃべるなんて特別にちがいないけれど、猫が言葉を話せるようになる日なのかな」

「失礼な、オレはいつでもしゃべれるわい」

猫は灰色の毛を逆立てた。

「怒りっぽいのね、猫さん」

猫が毛を逆立てるのは、怒ったときだ。

「フンッ」

猫はそっぽを向いた。

いつまでも、変な猫の相手なんかしてられないわ。
早く行かなくちゃ。私はおばさんの家へ続く細道を歩きはじめた。

両側は見渡すかぎりの田んぼだ。
今は春。まだ田植えには早いらしくて雑草が生えているだけだ。

「ところで、おまえは、何て名前だね」

道ばたに、さっきの猫がすわっていた。

「おどろいた、ついて来ていたのしらなかったわ」

「なんだと、ついて来たんじゃないわい」

猫は、もう一度毛を逆立てそうになって、途中で思いとどまったようだ。

「ふうっ、子猫を相手に本気になってもしかたないな」

口の中でもごもご言いながら、私の前に歩いてきた。

「子猫じゃないわ、私。人間の子よ」

「ははは、お前が、人間だって？」

「そうよ、私、人間の女の子だもん」

「まあね、そう思いたいなら、思ってもいいよ」

猫はうたがわしいというように、私を見上げた。

「まあ、いいさ。そのうちわかるからね。

さっきの質問に答えてないよ、小さい人間、何て名前だね」

なんだか、頭にくる猫だな、こんな猫に名前まで教える必要あるかしら。

「どうして私の名前が知りたいのよ、あなたに関係ないでしょ」

「関係あるさ、この灰猫さまがわざわざむかえに来てやったんだからな」

「むかえにに？ 私を？」

「そうさ、そうじゃなかったら、
よりもよってこんな大事な日に、こんなところにいるわけがない」

「なんだか、よくわからないけれど」

「わからなくていいさ、はやく名前を言え」

猫が命令した。

えらそうな言い方だなあ、猫のくせに。

「くせにとは何だ、年上に向かって」

私、思っただけで、言ってないのに……

とりあえず、名前を教えれば解放してもらえるかもしれない。

「じゃあ、言うわ。私は美祢子よ」

「なるほど、やっぱり」

「やっぱりですって？」

「やっぱり、猫の子じゃないかね」

「ちがうわ、私はミネコ。

そりゃあ、赤ちゃんの時はネコちゃんって呼ばれてたけど、

今はもう、そう呼ぶ人はいないもん」

猫は私の抗議を聞いているんだか、いないんだか、
大あくびをして毛づくろいをはじめてしまった。

ホントにもう、ばかばかしい、こんな猫を相手にしててもしかたないわね。
先を急ぎましょう。

あ、あった、あった。ここ覚えている。
つきあたりが大きな生け垣のお家で、右側にトタンで囲った倉庫があるのよね。
ここを右。さあ、最初の曲がり角を曲がったわ。

田んぼが終わって桜並木に変わっていた。
残念なのは、もう夕方になってしまったこと。
まわりが明るかったらどんなにきれいかしら。

薄暗い中に満開の花がぼんやりと白く浮かび上がっていた。
道の両側から枝が張り出していて、花のアーチのように見える。

「こんなにきれいなのに、お花見する人がいないのね」

これほどまでに見事な桜なら、評判になってもいいはずなのに。
ここに住んでいる人は見なれてしまっているのかしら。
大人達って夜に桜の木の下でお酒を飲むのが好きだと思ったけれど……

そういえば、誰も道を歩いていない。
前に来た時は、会う人会う人みんなが母さんの顔なじみみらしくて、
ごあいさつするのが大変だったんだから。

おばさん達って、どうしておしゃべりが長いのかしらね。

「おい」

声がした。

桜の木の根元に、さっきの猫がすわっていた。

「なによ」

「こっちへ来い」

あい変わらず威張っている。

「用があるならそっちこそ、こっちへ来れば」

「こっちだ」

猫は私がついてくるのをうたがようすもなく、先に立って歩き出した。

「私はおばさんの家に行かなくちゃならないの。
あなたにつきあってはられないのよ」

「いいものを見せてやる」

猫はそれだけ言うと、さっさと木の裏側へまわってしまった。

しょうがないな、道草している時間はないんだけど。
でも何を見せてくれるというのかしら。
別に無視してもいいんだけど……好奇心の方が勝ってしまった。

「待って」

私も猫の後について、桜の木の向こう側へまわってみた。

そこには、丈高い雑草に隠れたあぜ道があった。
大人では通れないかもしれない。おそらく猫だけが知っている道なのだろう。

湿っぽい草が足をぬらすので少し気持ちが悪かったけれど、
どんどん歩いていく猫の後を見失わないように追いかけて行った。

猫はでっぴりとした体つきにしては身軽で、小走りにしていかないと見失ってしまいそうだった。

それに持っている荷物が重い。

何が入っているのかはわからないけれど、さっきよりずいぶんと重たく感じられる。

「ねえ、猫さん」

私は息を切らせながら声をかけた。

「なんだ？」

「あのね、もうちょっと、ゆっくり歩かない」

「嫌だね」

「えーっ、どうして」

歩みを遅くしてくれるのを期待していた私は、あきれて声をあげた。

「私は猫じゃないんだから、そんなに早く歩けないわ」

「歩けるよ、おまえは子猫だもの」

「違う、さっきも言ったでしょう、私は人間の子だわ」

「何とでも言うがいいさ。子猫を甘やかすのは良くないんでね。
はってでも転がってでもいいからついておいで」

「そんなあ」

「ほら、行くよ。もう少しだ。あのやぶを越えれば着くからね」

どうやら猫ははげましてくれたいらしい。
いくぶん私をなだめるような口調で言った。

「灰猫さん」

どこかで声がした。

「おや、セッカチかい。どうしたんだ」

セッカチと呼ばれた猫は、カサカサ草の間から出てくると、首を曲げてチョコンとおじぎをした。
まだ子供の猫のようだ、赤いトラ猫である。

「いやあ、あんまり遅いんで、みんな心配してるんです。
それでオイラとこいつがようすを見に出てきたというわけ」

セッカチの後から、もう一匹、白と黒のまだらの猫が現れた。

「やあ、ぼうし猫も来たのか」

ぼうしと呼ばれるだけあって、ちょうど頭の部分が黒くて、ぼうしをかぶったようにも見える。

「お久しぶりです、灰猫さん」

「久しぶり、二人とも元気そうでなにより」

灰猫は、私に話すのとは段違いに優しい口調で言った。

「礼儀を知っている猫には、それなりの言葉があるんだよ」

灰猫は私の気持ちを読みとったようにニヤリと笑った。

「われわれは、秩序を重んじるからね」

私は、あきれて返す言葉が見つからなかった。

気まぐれでわがままな猫の口から礼儀とか秩序なんて言葉が出てくるとは思ってもみなかった。

「気まぐれで、わがままなのは人間の方さ。

我々がヤツらに振り回され、どんなに被害をこうむっていることか。

それにヤツらは自分が何でも知っていて一番えらいとかんちがいしている。

おめでたいいというか、なんと言うか……」

「灰猫さん、早く行きましょう」

ぼうし猫が遠慮がちに口をはさんだ。

「ああ、そうだった、人間のぐちをいいはじめるときりがなくなってしまうな。

急ごう、夜が来てしまう」

二匹の子猫が先に立って歩き始めた。

「さ、後からついておいで」

灰猫は私に命令すると、子猫の後に続いた。

やがて、せまい空き地に出た。

まわりは杉の木立に囲まれていて、一面に白い花が咲いていた。

「しろつめ草だよ」と灰猫は説明した。

あたりはもう、だいぶ暗くなっていた。

空には星ひとつ出ていない。

あい色がかかった宵闇の中でしろつめ草がほんのりと光っているようにも見えた。

「さあ、ついた。そっと見まわしてごらん」

そう言われて、私はまだ暗さに馴れない目をこらした。

ほたる？ あちこちで光るものがある。

いえ、ほたるにしては瞬かない、鋭く、何か強い意志をもった光。

「何かこっちを見てる」

私は、ちょっと気味が悪くなった。

「そうさ、あの光ひとつひとつは、猫の目だよ」

「ああ、そういえば、猫。あんなにたくさん」

闇の中の光は、ふたつずつ増え続け、

今では空き地全体がおおわれてしまったかのようにキラキラ輝いている。

物音ひとつしない、鳴き声をたてる猫もいないらしい。

「さあ、我々も行こう」

灰猫はゆっくりと空き地の中心に向かって歩き出した。

「さあ、おいで 二本足で立っているのはつらいだろう。

無理しないで前足をおろしてごらん」

私には、何を言われているのかわからなかった。

二本足で立っているのがつらいつて、

歩けるようになってからは、ずっと二本足で歩いてきたのよ私。

「見てごらん、なんてきれいな毛並みだろう」

いつのまに來たのか、ぼうし猫が隣に座って、私の顔をなめていた。

なめるっですって！

私、縮んでしまったのかしら。

ぼうし猫の顔がすぐ近くにある。

思わず目をこすろうとして手をあげると、私の両手は柔らかい金色の毛皮におおわれていた。

「ほうら、言っただろう。おまえは子猫だって」

灰猫は、私が驚いているの見て、面白そうに言った。

「でも、でも、私」

「さあ、持ってきた袋はどこにあるね」

「そこに、でも、重くてもう持てないわ」

「だいじょうぶ」

灰猫は、空き地をかこむ輝く光にむかって、誇らしげに宣言した。

「諸君、七年に一度、待ちに待ったこの時がやってきた」

セッカチと、ぼうし猫は、しずしずと私が持ってきた袋をくわえてきた。

闇の中の光がいっせいにまたいた。

あい変わらず物音はしないが、興奮しきった息づかいが感じられる。

猫になった私には、暗闇の中でもまわりが見えるようになった。

数百匹とも思われる猫たちが、空き地の周囲から、中央の紙袋に視線を集中させている。

「さて、今年の祭りの女王。金色猫を紹介しよう」

私は、灰猫に中央に押し出されて、とまどいながらおじぎをした。

そのとたん、四方からコロコロのど鳴らす音が聞こえた来た。
猫がのどを鳴らすのは、気分がいい時だから、どうやら歓迎してくれているらしい。

「紙袋に入っているものを出してくれないか？」

灰猫が私に言った。

私は袋の口から前足を差し入れて、丸い金色の玉を転がした。
大きなミカンだ！

南の国でとれるというザボンにちがいない。
子供の頃おみやげにいただいて食べたことがある。

「さあ、月が現れたぞ。闇の中に月を放り投げろ、この夜空に輝くように!!」

灰猫が合図すると、猫たちはザボンの月をめがけて走りよってきた。

いくら足跡がしない猫でも、
こんなにたくさんの猫が走るのだからかすかな地鳴りがした。

耳をふさぎたくなるほどニャーニャー、ギャーギャーうるさく騒ぎたてながら、
月を手に入れようと競争をはじめたらしい。サッカーみたいだ。

私も、セッカチとぼうし猫に促されて猫たちのサッカーに加わった。

走ると風が耳元で揺れる。

人間の時とくらべものにならないくらい軽やかに走れる。
となりを走っているセッカチに体当たりして、二匹でコロコロ転がしてしまったり、
あと少しというところで、月をつかまえられると思ったら、
草の茂みに弾んで、別の方へ飛んで行ってしまったり。

どの猫も大声で笑っていた。

もちろん笑うと言っても、人間のように笑うわけではないの。
うまく言えないけれど、体全体を使って笑う。

猫どうしならそれがよくわかるんだけど……

「トビだ！ トビ猫が勝ったぞ」

勝負は、意外にあっけなくついたようだ。

走りまわっていたのは、ほんの数分だろうか。

やはり猫は長距離ランナーには向かないらしい。

どの猫もハアハア息を切らしてその場にすわりこんでしまった。

金色の月のを前足で押さえて立っているのが、トビ猫らしい。

若い大きなキジ猫で、耳の端がちぎれて変形していた。

「さあ、トビ猫にこの冠をかぶせてやるんだ」

灰猫がしろつめ草の冠を手渡した。

私はうなずいて、そっと冠をくわえて前に進み出た。

あたりからは、またゴロゴロ喉を鳴らす音が聞こえてくる。

ふと気がつく。私もいつのまにかゴロゴロ言っているようだ。

特に鳴らそうと思わなくても自然に鳴ってしまうものらしい。

「おめでとう」

私は、背伸びをして冠をのせた。

トビ猫は、ちょっとはにかんだように笑って。それからふと、空を見上げた。

星ひとつ出ていない暗い夜空。

彼は数歩後ろへ下がって弾みをつけると、カー杯ダッシュして月を蹴り上げた。

月はくるくる不器用に回転しながら空中をを走り、

猫たちが見守っている前で夜空にとけ込んで行った。

やがて、雲の切れ間から金色の光があらわれた。

ほうっ、というため息があたりに広がる。

小さな月だ。

猫たちは静かに月を見つめている。

空き地のあちこちに、思い思いの姿勢でくつろいだ猫たちのシルエットが浮かび上がった。鳴き声をたてるものはいない、ゴロゴロのどをならす音が響いてくる。

私も、セッカチとぼうし猫とよりそって、月を見上げていた。夜風がヒゲを揺らすのでくすぐったい。両手を胸の下にはさんで香箱座りをしている。

「さて、そろそろお開きにしようか」

灰猫は背中を曲げて伸びをした。

「え、もうおしまい」

まだ、30分とたっていないような気がする。

もっと月の輝きを見ていたかった。

黙って座っているだけなのに、広場にいる猫たちみんなと、気持ちがつながっているような、なつかしい気がしていた。

「物事に執着しないのが美德というものだ」

灰猫は得意そうに胸をはった。

私には意味がよくわからなかったけれど、うながされてしかたなく中央に進み出た。

「諸君、祭りに金色猫が来てくれた時は、良い年になる。今年はたくさんの子猫に恵まれるだろう。食べ物も豊富にとれ、いつもに増して良い暮らしができるだろう」

灰色猫は広場を見まわして宣言した。

「終わりだ。解散！」

するとサラサラ草を踏みしめる音がして、
広場を囲んでいた光は、木立の向こうへばらばらに散って行った。

暗闇があたりを取り巻いている。

「さあ、われわれも帰ろう」

灰猫が私の耳のあたりをなめた。
ザラザラした感触がなぜか気持ちがいい。

「帰ろうと言っても」

どうしたらいいんだろう。
こんな子猫の姿でおばさんの家には行けない。

「は、灰猫さん」

私は心細くなって灰猫の後について歩きながら声をかけた。

「なんだね」

「あの、私、私………」

せまいあぜを抜けて、じゃり道に出たところで灰猫は立ち止まった。

「ここが、もとの道。おばさんの家は、ほら、すぐそこだ」

人間だった私には何でもない細道だったのに、猫の私にとってはひどく広く思える。
とがった石がデコボコして歩いて歩きにくそうだ。

「さあ、道を渡るから気をつけて。
突然、ジテンシャとかジドウシャとかいうヤツが出てくることがあるからな。
あれはどんな大きい犬よりも強敵なんだ」

灰猫は言って、私にお手本を見せるように、全速力で道を駆けぬけた。

「さあ、おいで」

どうしてしまったんだろう、私。
こわくて足が動かない。

さっきまではまわりに草が生えていて体をかかしてくれていたせいかしら、
ここに来て、まわりに何もなくなったら、とたんに不安になってしまった。

「さあ、だいじょうぶだよ」

「がんばって」

いつの間にか私の横に来ていたセッカチとぼうし猫がはげましてくれた。

私は二匹にうなづくと、尻尾でタイミングをはかり、一気にダッシュした。
ほんの一瞬、体がフワッと浮いたような気がした。
目の前に白い霧がかかったようなまぼろしが見え、

耳の奥で灰猫が何かつぶやいたような気がした。

「ネコちゃん」

家の前でおばさんが手をふっていた。

「おばさん？」

私は、目をこすろうとして手を見る。
ちゃんと指がある。

あれは夢だったのかしら？

でも、手さげ袋は、どこかへ置いてきてしまった。

空には猫の目のような三日月が……
そして、さらによく目をこらしてみると、

月の欠けた中心あたりに小さな金色の月が輝いているのが見えた。

「よかった、おそいから心配していたのよ」

おばさんはにこにこしながら近づいてきて、玄関へまねき入れてくれた。

「さあ、入って、もう暗くなってしまったから泊まって行くでしょう？
お母さんに電話しましょうね」

「うん、そうする」

私は答えて振り向くと、灰色の長い尻尾が道の向こうへ消えていくところだった。

「バイバイ」

私はつぶやいて、玄関の戸を閉めた。

「次のお祭りにも、また呼んでね」

あとがき

最後まで読んでいただきまして、ありがとうございました。

このお話は、子供の頃、母の手に引かれて
母の実家を訪問した時の記憶をもとに書いたものです。

「猫の月」というタイトルでしたが、
今回「黄金色のムーンサッカー」とタイトル変更し、
内容も少しだけ加筆修正しました。

大人が見ると何でもない風景も、子供の心を通して見ると
ちょっと怖くて不思議な世界に見えるものです。

あの日、田んぼのあぜ道で会った灰猫さんは、
今はもう消えて、小さな猫の月へとけ込んでしまっているでしょう。

我が家の飼い猫だったぼうし猫も、
きっと一緒に遊んでいるのだと信じています。

お読みになった感想やご意見などをお聞かせいただければ幸いです。
これをご縁に、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

それでは、またお会いしましょう♪

筆名 仲津 麻子 / 緋芽